

～「ふくしま原発作業員日誌

イチエフの真実、9年間の記録」から～

2019年5月10日 チハルさん(45歳)

(前略) イチエフを離れて1年が過ぎた。五輪の現場で働いていると強い違和感がある。来年の開催に向けて人も資材も足りないなか、工期に追われている。食べていかなきゃならないとはいえ、先にやるべきことがあるのに、俺はここで何をしているんだろう。今の東京の現場には、イチエフで同じ寮だった人や一緒に働いていた人がいる。顔を合わせれば福島の話になる。福島を離れても、福島のことをめちゃくちゃ気になる。でも、ほとんど報道されなくなった。

五輪招致で「汚染水の状況はコントロールされている」と首相が世界に宣言し、イチエフはますます事故現場ではなく、普通の工事現場とアピールされるようになった。防護服や全面マスクがいない地域も広がった。そんななか、一緒に現場で働いたことのある人が白血病で労災認定された。俺の被ばく線量の3分の1だったのに。怖いと思う一方で、やはりイチエフの作業はやらなくてはならないと思う。(後略)

「ふくしま原発作業員日誌」P.419 より

福島第一原発の現在

今、平日で1日4000人の作業員が働いている。これから厳しい夏を迎えるが、現場では既に熱中症の作業員が出ているという。事故後10年が経ち、原発の敷地内の線量は大幅に下がった。危険手当の出なくなった職種があったり、出ても減額されたりして、「イチエフで働くメリットがなくなった」という作業員の声もある。また、ピンハネをされて同じ仕事をしていても雇用されている会社によって日当が違うことがあるという。

今後、核燃料の搬出やデブリの取り出しなど高線量下の困難で危険な作業が始まる。「最後は人

だ」と言われている。現場を知るベテランや技術者がますます必要になるが、集め続けられるかが課題であるという。

「ふくしま原発作業員日誌」の中の作業員

インタビューに出てくる作業員は皆、福島や福島第一原発を何とかしたいという志や長年働いてきた現場で起きた事故だから収束まで見届けなくてはという責任感から事故後の原発に入った作業員である。前出の技術者のチハルさんは「あなたが事故を起こしたんじゃないし、あなたがつくった原発でもない。責任感ることない」と妻とけんかをして関東から福島に来ている。

そういう人たちが、被ばくの恐怖を感じながら「どうせ使い捨て」「仕事があるときだけ、しかも被ばく線量が持つ間だけ作業員を呼ぶ」、という思いに至る働き方をさせられている。

被ばくの保障

事故直後、通常原発作業員の被ばく限度の100ミリシーベルトでは事故収束作業員が足りなくなると250ミリシーベルトまで引き上げられた。当時、労働時間が非常に短くて日当がいいと集まってきた作業員もいた。約2万人の作業員が働いていた。

10年が経ち、福島第一原発で働く作業員ががんなどの病気になっても、労災以外の保障はないという。しかも作業中に熱中症やけがをしても所属企業から労災の申請を取り下げられるように言われることもある。被ばく労働者のがんの労災申請の認定基準は白血病しかない。それ以外のがんについては目安が設けられているが、白血病に比べて認定のハードルが格段に高いという。労災認定を発表するたびに厚労省は「被ばくとの因果関係が証明されたわけではない」と繰り返している。裁

判に訴えても現在まで作業員側が勝訴した事例はない。著者は「未曾有の原発事故が起き、作業員の被ばく線量が格段に上がったのに、通常の工事現場で働くのと同じ『労災』を申請することでしか、保障がされない。『労災』とは別の枠組みの、労働者側に不可能な因果関係の立証を求めるのではなく、被ばくした作業員が病気になった時、病気への被ばく労働の影響が否定できなければ、保障する制度を作るべきである。」と書いている。

<放射線業務従事者の被ばく線量限度>

(単位 ミリシーベルト)

通常被ばく限度	1年間で50、 かつ5年間で100
緊急作業時の被ばく限度 (緊急作業期間中)	100
福島第一原発の緊急作業 時の被ばく限度	250

*野田首相の「事故収束宣言」を機に250ミリシーベルトから100ミリシーベルトに戻した。

一般人の被ばく限度は1年間で1ミリシーベルト

「ふくしま原発作業員日誌」について

聞き取りは作業員だけに限られているが、これは、福島第一原発版「チェルノブイリの祈り」ではないかと思う。かつて「チェルノブイリの祈り」を読んだとき、こういうルポルタージュが福島第一原発事故においても書かれないものかと思っていた。

著者は東京新聞の記者で、この本は東京新聞に2011年9月から2019年10月まで連載された記事が基になっている。話をしてくれそうな作業員を見つけ出すことがまず大変である。身分の不安定な作業員は原発内部のことを外部の記者に話したことを上司に知られたら解雇にもなりかねない。居酒屋の個室などで飲食を共にしながら何時間も話を聞き信頼関係を作った。身分を守り記

事にした。

原発事故から8年後著者ご自身が咽頭がんを発症した。それを聞いた作業員の方たちが心底心配してくれたという。

「福島原発作業員日誌」片山夏子著

朝日新聞出版 2020年発行

*原発文庫にあります。(田村 ゆう子)

福島第一原発「処理水」の 海洋放出について

政府は今年4月、福島第一原発の放射性物質(トリチウムなど)を含んだ「処理水」を海洋放出することを決めた。約2年後に実施する予定である。このことについて2つの点で問題があると思う。

①原発などの原子力施設の周辺住民への健康影響を懸念する声がある。例えば、北海道の泊原発について、斉藤武一氏(注1)が、佐賀県の玄海原発や青森県の六ヶ所再処理工場について、森永 徹氏(注2)がそれぞれ公開されているデータから推論し懸念を表明している。

つまり、福島第一原発でのトリチウムなどを含む「処理水」の海洋放出は、単なる「風評被害」でない可能性があり、詳しい調査が必要ではないか。

②通常運転している世界中のどの原発からも、トリチウムなどの放射性物質が放出されている。このことから、福島第一原発でも、その基準に基づいて一定濃度での放出は認められて当然という主張がされている。しかし、山寺 亮氏(注3)が述べているように、事故を起こして大量の放射性物質を放出してしまった福島第一原発では、できる限り新たな放出は避けるべきだと思う。

(注1) 斉藤武一「泊原発とがん」(2016) 寿郎社

(注2) 森永 徹 ネット「原発・再処理施設から放出されるトリチウムと白血病の関連」(2018) 京都・市民放射能測定所開設6周年のつどい

(注3) 山寺 亮「週刊金曜日」2021.6.4 p.61

(田村 広史)